

「木造毘沙門天立像」保存修復事業

川村 研一

<修復前>



木造毘沙門天立像

総高 193.5cm

像高 182.8cm

髪際高 150.5cm

青森県

解説

本像は斗賀霊現堂周辺に複数あったお堂のうち、観音堂に十一面観音の脇侍として不動明王像と安置されていたと考えられる。鎌倉時代前半の制作と推定され、同時代の毘沙門天は岩手県盛岡市以北では本像のみで極めて貴重である。部材の構成や表面の漆箔処理は当時の北東北のレベルを超え、鎌倉などの仏師が関与した作であったことが伺える。

明治元年の神仏分離令以降は別当を担ってきた川村家に守り受け継がれてきたが、部材の大半が遊離した状態となっていた。南部町では展示収蔵施設の整備を進めており、本像も展示される予定となっている。修復を経た本像を一般公開することは、歴史や文化を再認識する大きな意義を有している。

<修復後>



修復業者

株式会社明古堂

修復内容

遊離している部材の組み上げと、框の新補による自立安定化を目的とした保存修復事業である。

沈着した汚れのクリーニングをしたうえで燻蒸を行った。大半の部材が遊離していたが、打ち込まれていた鏝や釘を除去している。虫損部位等にはパロライドを含浸し、必要箇所には人口木材を充填して補強している。構造に関わる矧目等の欠損部位は木曽檜材で新補した。

解体された部材は、麦漆と人口木材を使用し、防腐処理を施した鏝と真鍮釘を併用したうえで、適正な位置で接合している。接合部分は胡粉下地のうえ補彩した。框を新補して立像の自立を安定化させた。

毘沙門天像 一軀

青森県三戸郡南部町大字斗賀上斗賀九 川村研一

修理報告書

株式会社 明古堂

名称

毘沙門天立像 木造 一軀
青森県三戸郡南部町大字斗賀上斗賀九 川村研一

法量 (cm)

本体

総高 一九三・五

像高 一八二・八 (六尺三分)

髪際高 一五〇・五 (四尺九寸七分)

頭一顎 二八・九 面長 二〇・四

面幅 一四・八 耳張 二〇・七

面奥 二三・〇 肘張 六一・五

胸奥右 二八・七 腹奥 二九・三

裾張 六一・五 最大幅 八八・五

足先開 四九・五 足柄高 八・五

踵高低差 一三・五

頭体幹部中 二尺一寸三分

頭体幹部奥 一尺二寸

台座

框幅 八四・六 框奥 七八・七

框厚 一〇・七

形状

天冠台を付ける。頭髮は天冠台下の正面を毛筋彫りとし、そのほかは平彫。瞼目、口を閉じ上歯を見せる。大袖衣・鱗袖衣・袴・裙を着け、各種甲・肩嚙を付け、背皮を当て、天衣を腰帯に結び、杳を履く。面をやや左方へ向け、左腕は屈臂し手首を左肩脇に挙げ、右腕は肩を後方へ引き振り上げて五指を曲げ、腰を左に捻り右膝を挙げ、靴を履いて立つ。

品質構造

カツラ材。割矧ぎ造り。彩色。

頭体幹部は頭頂から両足柄まで一材、木芯は頸部右後方から右腰脇を通り股間へ至り、右脚部を含む右腰以下を右腰から股間右方にかけて体部よ

り割矧ぎ、襟下から両膝後方へ通る線で体部を前後に割矧ぎ内割りし、前方材の上半身右側を襟際右方から右胸を通り右腰脇へ至る線で右腰脇に鋸を入れ割放ち、襟後方を割矧ぎ割首し、左脚部を割放つ。頭部は左耳後ろおよび右耳前を通る線で前後に割矧ぎ内割り。右腰以下は内割りし、膝後方で前後に割矧ぎ、膝内側で左右に割矧ぎ、右脚部を割放ち、体部との矧目にマチ材を挟む(前後二材を矧ぎ、後方へ向かい楔形とする。最大厚は二寸)。左腕は肩から手首までを一材とし肩で丸柄留めとし、右腕は肩・肘・手首で矧ぎ、肩で角柄留め。左右靴先は足柄上面へ水平に蟻柄挿しとする。

表面は布貼り、錆漆、黒漆・生漆、彩色・漆箔・箔彩色。

保存状態

- ・表面は塵芥などの汚れが沈着していた。
- ・彩色層は各層の浮き上がり剥落が進行する。
- ・各矧目はすべて離れ、自立することができなかった。
- ・面部右側、右腰の一部、股間部位は割損を生じていた。
- ・矧目を結合していた鉄釘、鉄鋸は錆を生じ、保持機能は不能であった
- ・左手首先、左右持物、右腕の備柄、以上は亡失する。
- ・右手第二指先は欠失する。
- ・矧目に沿う欠失部を多数生じていた。
- ・頭頂部、背面襟際、右肩、右膝、股間部、以上に欠失部位を認めた。
- ・右袖と右膝後方に焼損を認め、右大袖および鱗袖垂下部は大きく欠損する。

虫喰いによる損傷は全域にわたり、右手首矧目、足首下および足柄は大きく欠損していた。
・右腰襠材の前半部、大袖左袖垂下部の内側は脱落していた。

修理仕様

- ① 像表面を乾式クリーニングし、汚れを除去した。
- ② 低酸素濃度処理による殺虫燻蒸を10週間おこなった。
- ③ すべての矧目を解体した。鉄釘・鋸を取り外した。
- ④ 浮き上がる彩色層の剥落止めを施した。メチルセルローズを使用した(水溶液濃度は最大2%)。

- ⑤ 虫穴・腐朽・焼損部位にパラロイドを含浸した。
- ⑥ 虫穴・腐朽部位へ木屎漆および人工木材を充填し補強した。虫穴は直径2 mm以上、損傷部位は引つかかる恐れのあるところのみに留め、塑形は行わなかった。
- ⑦ 構造にかかわる矧目などの欠失部位を木曽檜材で新補した。
- ⑧ 左右足柄から足首にかけてステンレス製丸パイプ（直径12 mm、長さ左150 mm・右170 mm）を挿入し補強した。
- ⑨ 解体された部材を適正な位置で接合した。麦漆と人工木材を使用し、鍛造鉄鋸と真鍮釘を併用した。鋸は焼漆による防錆処置を施した。左右靴先は接合しなかった。
- ⑩ 接合した矧目、鋸は埋木・木屎漆・人工木材で補修し、胡粉下地のうえ補彩した。木屎漆の補修は当初面より下がる位置に留めた。
- ⑪ 台座の邪鬼は虫損による損傷がいちじるしいため別置保存とし、框を新補し、本体の自立を安定化させた。木曽檜材製、端喰造り。

使用材料

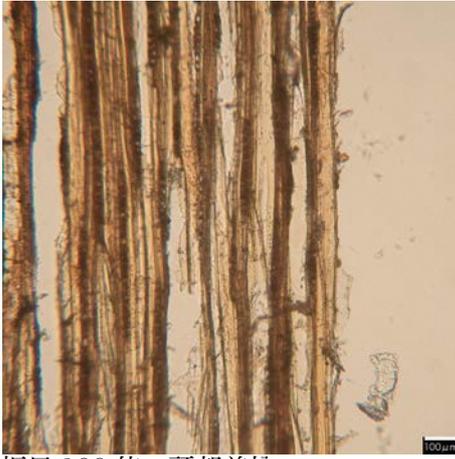
- [ラテックスゴム：Wall master]
- [木材：木曽産檜]
- [メチルセルローズ：メトローズ SM100・信越化学工業株式会社]
- [胡粉：放光堂 水干胡粉参号]
- [漆：東京上野・渡邊商店]
- [膠：牛皮和膠特1、一般社団法人天野山文化遺産研究所]
- [鉄鋸：白鷹刃物工房]
- [人工木材：アクソソシヤパン株式会社 S222・セメダイン株式会社 HC-118・コニシ株式会社 Eセット]
- [パラロイド：ROHM and HAAS Company Paraloid B72]
- [アクリル絵具：Liquitex ACRYLIC・ターナー色彩株式会社 ACRYL GOUACHE]

分析

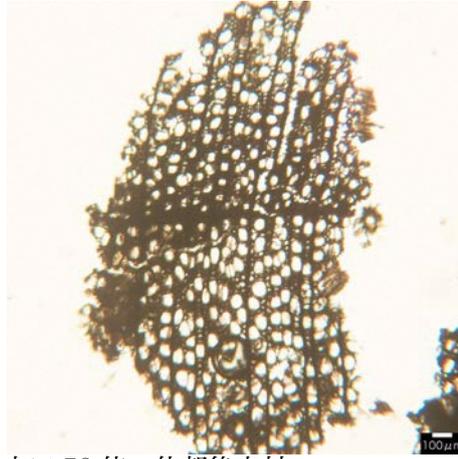
① 木材組織

顕微鏡で木材組織を拡大観察のうえ樹種同定を行った。頭体の矧目より木口・柾目・板目の三方(約1mmの薄片)を採取し、光学顕微鏡による透過観察画像で解析した。

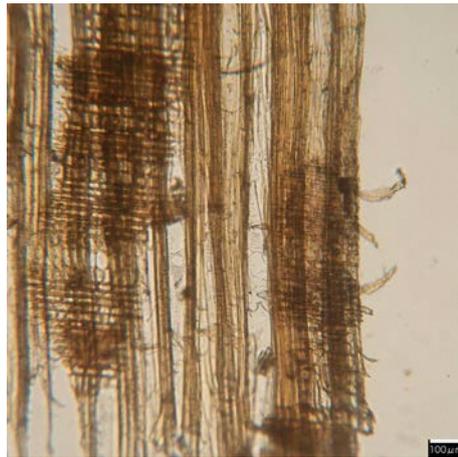
木口では導管の配列は散孔材で、単独または二、三個が放射方向に接合し、年輪内にまんべんなく分布する。柾目では導管に階段せん孔を認める。放射組織は上下縁辺が直立細胞で、中間は方形と平伏細胞からなる。板目は導管に数珠状の階段せん孔を認める。以上より本像の樹種はカツラ材である。



板目 100 倍 頭部首柄



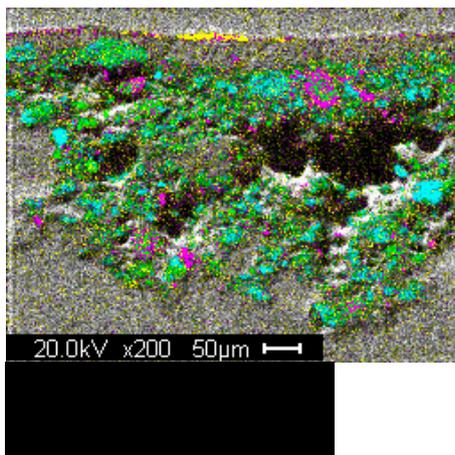
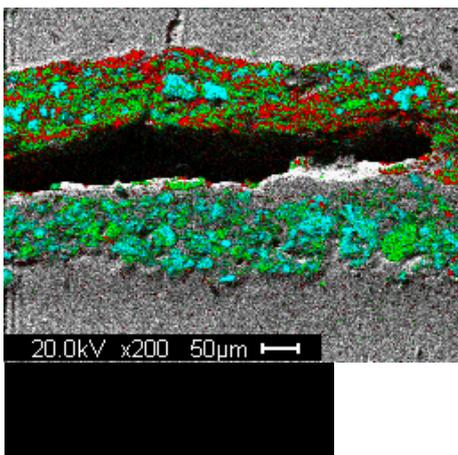
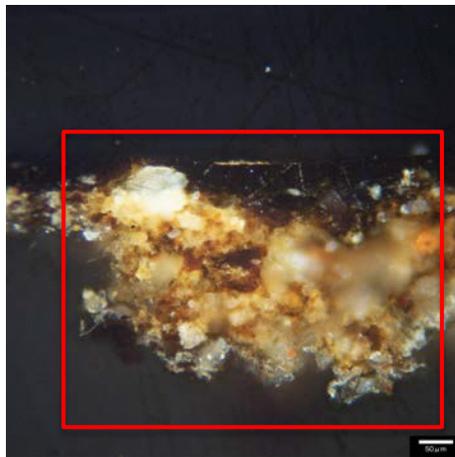
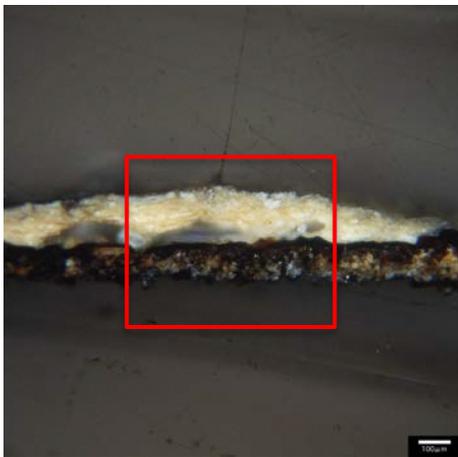
木口 50 倍 体部後方材

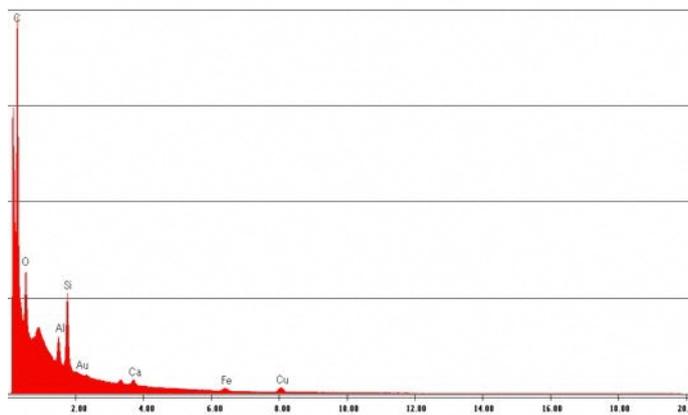
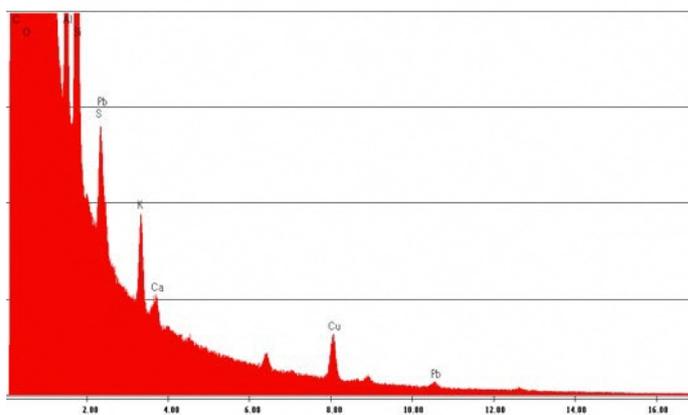
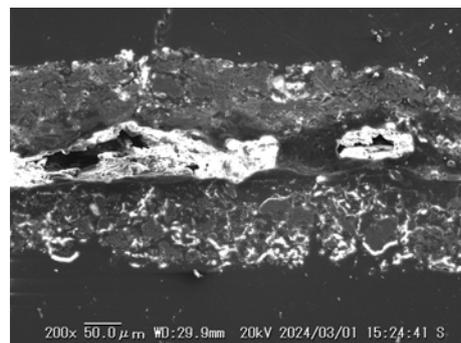
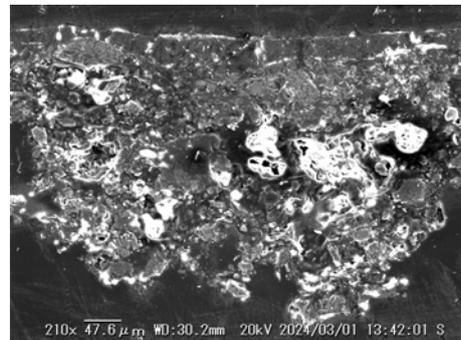
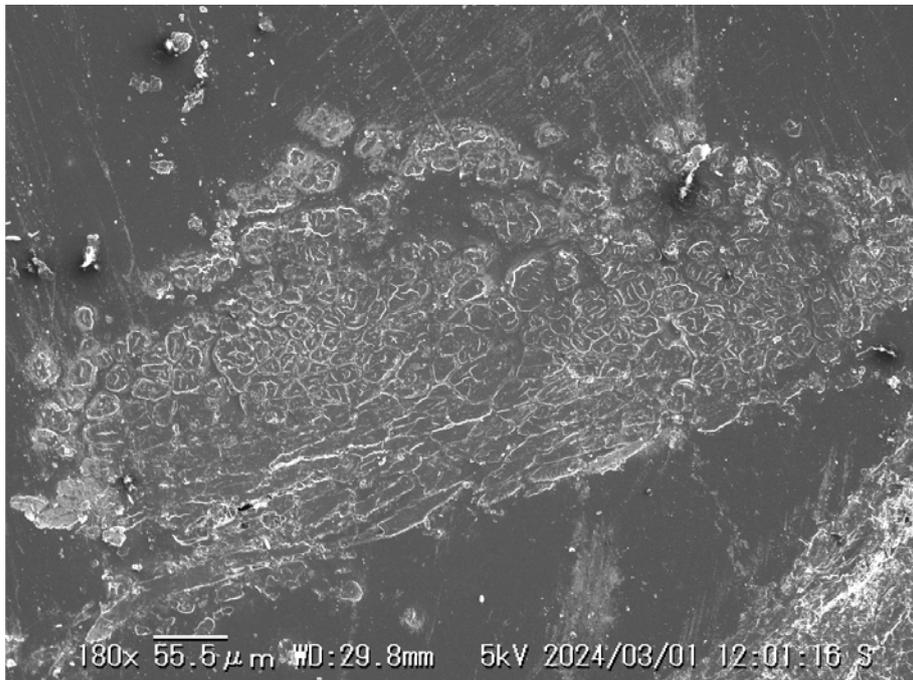


柾目 100 倍 体部後方材

② 彩色分析 表甲 (左腋後方) および表甲下縁 (小札左側) をクロスセクション分析した。光学顕微鏡により拡大観察し、EPMA (Electron Probe Micro Analyzer: Keyence VE7800, EDAX Genesis) で元素分析を行い、検出

された元素をもとに顔料の推定を行った。下地は布貼り・錆漆とし、表甲は黒漆に漆箔、下縁は生漆に白色を塗る。白色は白土に少量の鉛白を混合したものと考えられる。布貼りは側面にやや竹の節状線を認め、断面は扁平な多角形状であることから、大麻あるいは苧麻を原料とする麻布である。白土の組成は $[Al_2Si_2O_5(OH)_4]$ 、鉛白は $[2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2]$









割首



頭部首柄



割脚



体部右側



木芯 頭部・右腰・股間



木屎漆の充填



パラロイド含浸



背面材下方 処置前

二、虫損部位の補強



虫穴の充填



面部 処置前

三、新補・組み上げ



自立姿勢の調整



框の試作



体部右側



体部前方材・右腰



右腕



右肩矧目



左肩矧目



右足柄

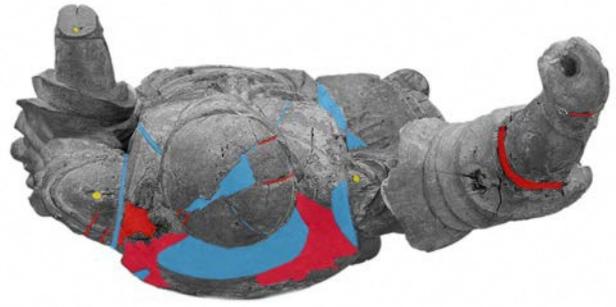
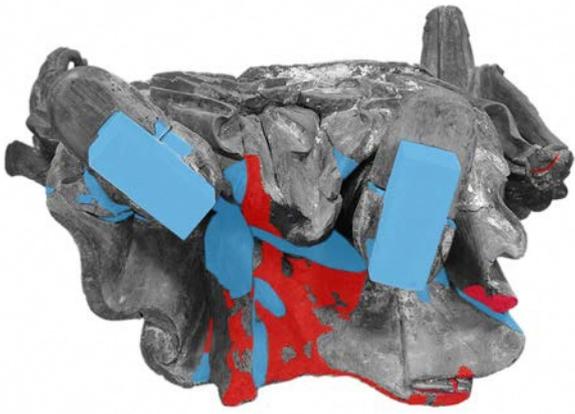


左足柄

修理図解

■ 補修・補彩部
■ 新補部
■ 鉄鏝







保存修理後



保存修理前



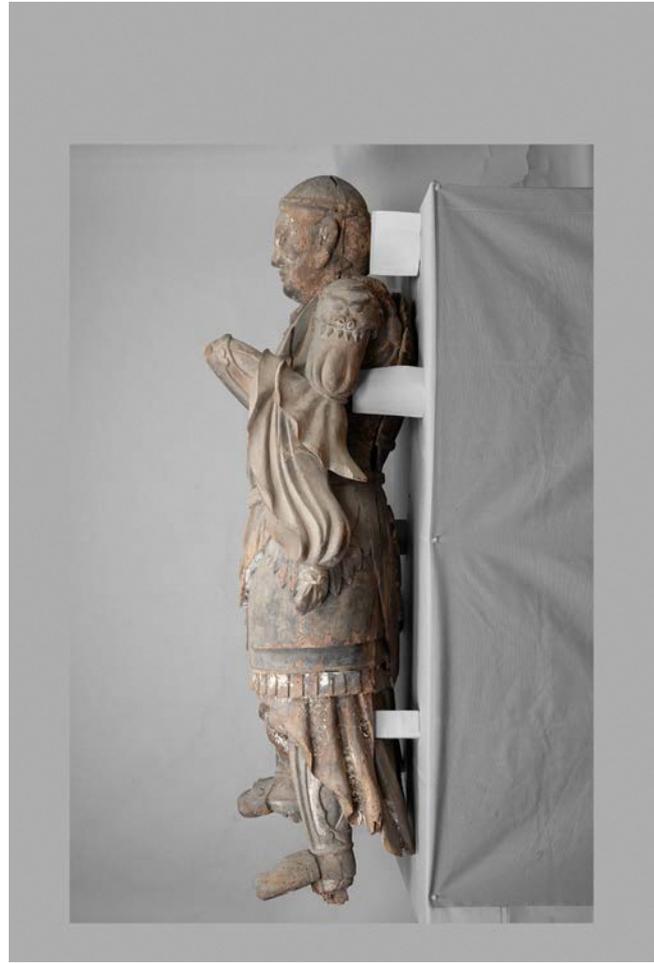
保存修理後



保存修理前



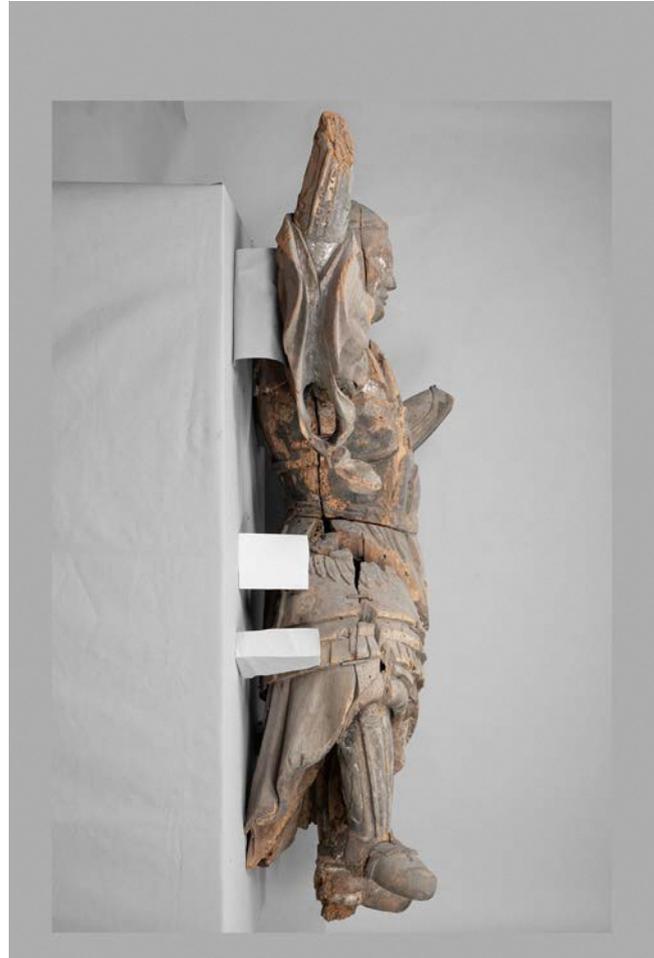
保存修理後



保存修理前



保存修理後



保存修理前



保存修理後



保存修理前



保存修理後



保存修理前 脱落部材 □使用部材

施工者及び施工場所

株式会社明古堂 明珍素也

東京都世田谷区豪徳寺二丁目一二

令和六年三月

